

「沈黙」の移動 ——魯迅が訳した「沈黙の塔」と「羅生門」をめぐって

李 雪

1 はじめに

本稿は、「新文化運動」が展開した啓蒙期（1918年～1922年）の中国において、「日本文学」がいかにく移動・く受容されたかに関する考察である。

この「新文化運動」は、中国近代化にとって、重大な意義を持つ文化啓蒙運動であった。この時期における新文学（「新文化運動」に共鳴し創作する文学）にみられる著しい特徴は、外国文化を吸収したということである。とくに、日本小説の翻訳・翻案や日本語からの欧米文学の翻訳（重訳）などが、この時期に盛んに行われた。

七年間の日本留学を終え、1909年、日本から帰国した魯迅は、この新文学運動の推進に精力を傾注し、幅広い文化建設に参加した。彼は、新文化運動の一環として、文学の「近代化」を追求し、自ら文学創作に携わる一方、日本文学の翻訳をも精力的に行った。

魯迅は、森鷗外の「沈黙の塔」を訳し、1921年4月21日から24日にかけて、『晨报』（第七版）（北京新聞紙）に掲載した。題名は「沈黙之塔」であった。

この鷗外の「沈黙の塔」は1910年11月に『三田文学』に発表され、のちに、ニイチエ作で生田長江訳の『ツアラトウストラ』（新潮社、1911年1月）に序として掲載された。その際、「訳本ツアラトウストラの序に代ふ」と副題が添えられていた。1921年、魯迅は「沈黙の塔」の訳を発表したほぼ2ヶ月後、芥川龍之介の「羅生門」を中国語に訳した。今日、芥川の代表作の一つと目されるようになっているこの作は、もともと、1915年11月、『帝国文学』（第21巻第11号）に掲載されたものであった。しかし、当初、友人からは無視に近い評価しか受けることがなかったらしい。では、何故、これらの二篇の小説が魯迅の注目を引いたのであろうか。そこに、魯迅が感得した要素とは、一体何であったのであろうか。

2 芥川と魯迅の『ツアラトウストラ』受容

芥川龍之介の「羅生門」は、『今昔物語集』所収の「羅城門登上層見死人盗人語第18」が主たる典拠であるとする研究を始めとして、多様な研究がなされてきている。本稿の関心からいえば、そうした研究の中でも、比較文学的研究に注目したい。小堀桂一郎⁽¹⁾は、「羅生門」とフレデリック・ブウテエの作品で森鷗外訳の「橋の下」との関連を指摘し、竹盛天雄⁽²⁾と平岡敏夫⁽³⁾は、M・G・ルイース作『マンク』との関係を、さらに、水川景三⁽⁴⁾はブレイクとの関連を指摘している。

こうした比較文学分野の先行論の中で、渡辺正彦の論⁽⁵⁾はわれわれの関心にとって有益である。渡辺は、芥川のテキストの特色を、堀辰雄の見解を引用して、次のように説明している。

堀辰雄の有名な「彼はすでに彼固有の傑作を持たなかったと断言してよい。彼のいかなる傑作の中にも、前世紀の傑作の影が落ちているのである」という言葉は、芥川の文学の優れた「個有」性が古今東西、彼我の文学と思想とのコレスポンスダンスを持つ開かれた点にあることを意味している。

こうした「コレスポダンス」の一つとして、渡辺は、ニイチェの『ツアラトゥストラ』をとりあげ、関口安義の功績を紹介している。⁽⁶⁾

「羅生門」に『ツアラトゥストラ』が落とした影（受容）を見出すことは、関口安義氏以降の近年の「羅生門」の読みの潮流を考慮すると非常に有利な状況になっていることも確かである。つまり、関口氏以降の読みは『ツアラトゥストラ』におけるツアラトゥストラの〈道徳の超克〉と〈超人〉の思想にますます近似してきているからだ。

このあと、渡辺は、「羅生門」と『ツアラトゥストラ』との関連性をつぎのように整理している。

ツアラトゥストラは神の死を宣告する。「羅生門」では、洛中の仏像や仏具が薪の材料にされ、王朝と貴族の政治的、宗教的な權威の象徴であった羅生門はその崩壊が放置されていた。「羅生門」における、神（仏）の死である。

「羅生門」が、洛中にとって周縁にあるという記号論的な見方からすれば、古い秩序の中心から遠ざかって、新たな生を獲得し、中心に戻って古い秩序を再編するということになる。あるいは、羅生門における老婆との出会いは、活力を失った古い世界を送り、新しい生き生きとした世界を迎える祝祭（カーニバル）であったとも言える。（中略）

『ツアラトゥストラ』は、あくまで、地上的な道徳の自己超克としての〈超人〉、神の死と権力への意志、永却回帰の思想について語った哲学書である。しかし、「羅生門」の盗人になることを選べない飢えた下人が、下から楼に登り、死体の群れを前にして老婆と問答し、勇気と行動を獲得して、真夜中の暗闇に向かって門を駆け去って行くという道徳の自己超克の姿は、己れをつまづかせる高貴な人間たちと洞窟での真夜中を経て大いなる朝・正午へ向かって「洞窟」を去るツアラトゥストラの姿を彷彿とさせる。下人にとっての羅生門の楼はツアラトゥストラの「洞窟」である。すなわち、物語構造における類似を見てとることが可能なのだ。芥川が今昔物語巻四「羅城

門登上層見死人盗人語第十八」を読んだ時に、手擦れができるほど読んだドイツ語版「ツァラトゥストラ」のイメージや思想を喚起されたと想像できるのである。⁽⁷⁾ (傍線は引用者による、以下同様)

一方、周知の通り、魯迅は、清政府の公費留学生として日本に留学していた。東京の留学時代に魯迅は、幅広くヨーロッパ近代思想と文学とを受容し、習得していた外国語は日本語とドイツ語で、ロシア語は多少学んだものの、中国語訳をするほどの域には達しておらず、彼のロシア語文献の翻訳は、日本語またはドイツ語からの重訳である。⁽⁸⁾

魯迅が東京にいたのは、1902年から1909年であった。独逸語専修学校の学生になり、1908年4月、かつて夏目漱石一家が住んでいた本郷・西片町の家を借り、そこを「伍舎」と称したといわれる。明治後期の地図からわかるように、「伍舎」は、本郷区にあって、本屋の中西屋、東京帝国大学、輸入業の丸善などが、容易に利用できる位置にあった。

「伍舎」に住んでいた1908年、魯迅は、「文化偏至論」と「摩羅詩力説」とを発表した。これらの論文は、日本や欧米の文芸評論を典拠にし、近代文明観を提示しつつ中国を新しく文明化して救うための大胆な提唱を行っている。藤井省三は「文化偏至論」の主旨を分析し、次のように評価する。⁽⁹⁾

「文明もまた偏至せざるをえない。もし今の為に計を立てるならば……物質を抑えて精神が発揚すれば、個人を用いて多数を排すべきである。個人の精神が発揚すれば、国家もまた興起するのである」というように青年時代の魯迅のヨーロッパ文明観と中国近代化論が大胆に語られており、次の「摩羅詩力説」とともに「初期魯迅」思想を考えるうえで、重要な論文である。

この二篇の論文の思想性を考えてみれば、当時の魯迅は、精神の価値と個人の尊重を主張し、ニイチェの超人説の影響を受けていたと推察できる。このニイチェ受容は、日本留学期になされたもので、大量の西洋書物を媒介としてニイチェの思想を受け入れ始めたと考えられる。したがって、留学時の魯迅は、明治後期の日本人青年知識人と共通の基盤を有していたといえよう。

魯迅は、民国初年から、「西洋文芸」と「偶像破壊」についていくつかの評論やエッセーを書き始めた。次の「随感録 四七」からの引用は、典型的なものである。

この間、又一枚所謂「澁克」を見かけて、これは新文芸を提唱する人への罵声だ。崇拜するのは全部外国偶像と指摘した。この美術家の哀れをさらに感じた。彼は画を習って、しかも「澁克」を描いて、なんと意外にも、外国の絵も文芸の一つだということは知らない。彼は自分の本業について、まだ黒い壺に籠っているようにわからないのに、まして優美な創作を社会に貢献できるのか。

ただ、彼が「外国偶像」という四つの文字をどうやって思い出したのか。中外を問わず、実際どこにも偶像はある。だが、外国には偶像を破壊する人が多い。その影響の及ぶところ、宗教改革やフランス革命が成功した。旧偶像が破壊されればされるだけ、人類は進歩する。(拙訳)

この時期の魯迅は、「個人解放」、「新思想」の提唱をしながら、伝統批判、偶像破壊論において、鋭い風刺の姿勢を示していた。

ニイチェをより多くの人々に知らせるために、魯迅は、『ツアラトウストラ』を翻訳しようとした。最初は、文語体で第1巻の「序説」の3節を訳した。その後、口語体で翻訳したこともあるが、結局、「序説」の9節にとどまった(1920年6月の『新潮』第2巻第5号に刊行される)。さらに、その後、郭沫若もその一部分を訳したが、完訳に到らなかった。そこで、魯迅は、若い翻訳者の梵澄に完訳を託し、梵澄はその期待をまっとうした。のちに、この訳文は『世界文庫』(叢書)第8、9冊(1935年12月、1936年1月)に連載された。この訳文は、今日でも、商務印書館が出版した『漢訳世界名著叢書』に収録されている。現在の書名『蘇魯支語録』も、魯迅のアドバイスをもとにして決められたという。

3 中国語訳「沈黙の塔」の場合

魯迅は、1920年、『ツアラトウストラ』の「序説」を「査拉圖斯忒拉的序言」と題し、「唐俟」というペンネームで中国語訳し、国立大学北京大学出版部が出していた『新潮』第2巻第5号(1920年6月)に載せていた。また、「沈黙の塔」には、「《沈黙の塔》(Chinmoku no to) 原系《代〈査拉圖斯忒拉〉譯本的序》、登生生田長江の譯本(1911)的卷首」という情報を与えていたである。⁽¹⁰⁾

では、魯迅が鷗外のこの小説に着目し、それを現代白話文によって訳したのは、何故であったのか。まず、訳者・魯迅の附記を確認しておきたい。

森氏號鷗外、醫學家、也是文壇的老輩。但很有幾個批評家不以然，這大約因為他的著作太隨便，而且很有老氣橫秋的神情。這一篇是代「査拉圖斯忒拉這樣說」譯本的序言的，諷刺有莊有諧，輕妙深刻，頗可以看出他的特色。文中用拜火教徒者，想因為火和太陽是同類，所以借來影射他的本國。我們現在也可借來比照中國，發一大笑。只是中國用的是一個過激主義的符號，而以為危險的意思也沒有派希族那樣分明罷了。一九二一 四 一二 (1921年4月24日、『農報』第7版)

(森氏号鷗外、医学家、文壇の大先輩でもある。だが、何人かの批評家はそう思わない。これは、彼の作品はあまりにも気ままで、年寄りじみて元気がないように見えるからだろう。この一篇は『ツアラトウストラはかく語りき』の訳本の序で、諷刺が重々しい中にもユーモラスなところがあり、軽妙かつ深刻で、なかなか彼の特色が窺え

る。文中で拜火教の信者を取り上げたのは、火と太陽とが同類だから、仮託して彼の祖国をあてこすったものと思われる。だが、我々がこれを中国にあてはめてみれば、たちまちふきだしてしまうであろう。ただ、中国で使っているのは過激主義という符牒だけで、危険の意味もパアシ族のようにはっきりとしていないだけなのである。(1921年4月24日、『晨报』第7版)(拙訳)

この「訳者付記」が2年後の1923年に出版された訳文集『現代日本小説集』に収録されていないことが意味深い。そこに時事的要素が含まれていたと考えられる。ここで注目すべきことは、魯迅が用いた「過激主義」ということばである。これは、当時、北洋軍閥のとなっていた「図書検閲政策」と関係がある。

1914年12月、袁世凱の政權は「出版法」を公布した。この法規は「出版物である文書図画は、発行事前に、政府検閲機関を取り次ぎ、そして出版物は一部で該当政府機関に送り届け、一部でこの政府機関を通じて(通って)内務部(省)に送り届ける」というものである。この規定によって、中国の近代の図書検閲制度が開始された。後の北洋軍閥の政權は、同様に文化の領域に対して監視し抑制することに力を注ぎ、特にロシアの十月革命の後、マルクス主義の広く伝わることに厳重に警戒し、一度に83種類の「過激主義を宣伝する」図書を取り締まった。いくつかの有名な書籍と雑誌、例えば『湘江評論』、『自覚』、『浙江新潮』などはすべてこの時期に禁じられた。⁽¹¹⁾

魯迅は、「過激主義がやって来る」(1919年5月『新青年』)という題の文で、自身の立場を明らかにしてもいる。そこで彼は、つぎのように述べている。

ちかごろ、よく人が「過激主義がやって来る」という。新聞にもよく「過激主義がやって来る」と書かれている。……厳重な調査も、もっともなことだ。だが、最初にまず訊ねたい。過激主義とは何か。これは、かれらは説明してくれない。だから、私にもわからないが、しかし、このことだけはいえる。「過激主義」なんかはくるはずがない。恐れる必要はない。(中略)

われわれ中国人は、舶来のいかなる主義によっても動かされることは絶対でない。それを抹殺し、撲滅する力があるのだから。

これすなわち「やって来る」が来るのだ。来たのがもし主義なら、主義が選せられればやむはずだ。⁽¹²⁾

こうした思考形態の中で、魯迅は「沈黙の塔」の翻訳を企画し、そこに何らかのメッセージを託したと考えられる。それは、何であったのだろうか。

「沈黙の塔」では、鷗外はつぎのような一節を書いている。

直ぐに己の目に附いた「パアシ族のちなまくさ血腥き争闘」という標題の記事は、かなり客観

的に書いたものであった。

この一節を魯迅は、つぎのように訳した。

立刻引了我眼睛的“派希族的血腥的爭斗”這一個標題的記事，卻還算是客觀的記著的。

注目すべきなのは、魯迅が「派希族」という訳語を用いたことである。一般に中国語では、「Parsi」に対応する語は、「波斯」である。しかし、魯迅訳の「沈黙の塔」には、「波斯」という語はみられない。何故、魯迅は一般的な「波斯」を用いるかわりに、「派希」という語を用いたのであろうか。

魯迅が「波斯」の語を知らなかったわけではなかった。実際、魯迅はニイチェの『ツァラトゥストラ』を翻訳しようとし、「序説」の前の九節だけを中国語にして、それを1920年6月の『新潮』第2巻第5号に載せた。該当箇所はつぎのようになっている。

Zarathustra 是波斯拜火教的教主，中國早知道。

ここで、「波斯」は下線(傍線)で標示されている。(当時は外国の固有名詞が殊に線で標示される場合が多い)

この中国訳は、「沈黙の塔」の翻訳のほぼ10ヶ月前のものであった。したがって、魯迅が「派希」という訳語を採用したのは、何らかの意図をもってのことであったと推察できる。その意図を推測することはむずかしいことではあるが、それを分析するには、まず、同時代の状況と照らし合わせなければならない。

1902年からの日本留学を終え、1909年に魯迅は帰国した。1910年、辛亥革命後、中華民国には、中国全土を完全に統治する「統一政府」が存在しない状態が生まれた。そのため、軍閥が群雄割拠する内乱状態となり、北洋軍閥は段祺瑞の安徽派、馮国璋の直隸派、張作霖の奉天派に分裂し、首都北京の争奪戦を繰り返した。各軍閥それぞれが独立政権化し、同時に日本やフランス、アメリカなどの列強諸国による中国の半植民地化も進行した。実際、軍閥割拠は、1910年代後半の中国に分裂状態をもたらしていた。

周知の通り、「魯迅」という名は、実在する人物・周樹人のペンネームのひとつである。この時期、周樹人は、翻訳者として、「魯迅」よりも活発な文学活動を行っていた。と同時に、彼は教育局に課長として勤務していた。

当時、『晨报』であった孫伏園は、「魯迅」の思い出を文にして、官僚の「魯迅」の苦悶を明らかにしている。

魯迅先生の人生の大きな転換は北平を離れたことだ。北平にいた時には官僚だった

から苦しかった。当時、彼は作品を発表する際に、実名を使ってはいけなかった。それと同時に、思うままに外国語の本を読んではいけなかったので、木版の本を読むしかなかった。彼の同僚は外国語ができない。しかも、その当時の雰囲気は、学問をすることは木版の本に触れることに限られていた。彼は外国語ができることを他人に知られなくなかったのだ。周りの人たちは彼が留学したことを知っていたが、彼の古本しか触れないふりを見て、彼はすでに外国語を忘れただろうと思っていた。だから、北平時代の魯迅先生は、本当に「二重人格」であったようだ。ある日、彼は私にこのように言ったことがある。部長が突然、彼に聞いた、「周作人はあなたの兄弟だそうで、本当か？」彼は「はい」と答えた。「なぜ、彼を叱れないのですか？」と聞いた。周作人は、度々『新青年』で文章を発表していたからだ。それに『新青年』は、部長に「危険」と指摘された。実は、周作人先生は、何編かの文章を訳しただけだが、魯迅先生はすでに『新青年』で何編かのエッセイや創作した小説を発表していた。ところが、彼はペンネームを使い、周作人は本名を使っていたため、誰も彼のことは知らなかった。魯迅先生は、官僚として教育部に勤め始めたのは、民国元年だった。⁽¹³⁾ (拙訳)

こうした情報から、魯迅が、「波斯」でなく「派希」を用いたのは、後者が「派閥」を意味する「派系」とほぼ同音であったからであると思われる。かくして、「派希族的血腥の争闘」の訳は、「パアシ族の血腥き争闘」と同時に、中国国内の激しい「派閥戦」を暗示していたと考えられよう。

4 「沈黙の塔」から「羅生門」へ

すでに述べたように、「沈黙の塔」は、1910年11月、『三田文学』に発表され、のち生田長江訳『ツアラトゥストラ』(新潮社、1911年1月)の序として、「訳本ツアラトゥストラの序に代ふ」という副題を付けて再掲載された。この作品は、1910年9月16日から10月4日にかけて全14回にわたって東京朝日新聞に連載された「危険なる洋書」の鷗外批判に対する個人的な反駁という性格を前景にもちながら、それと同時に、ニイチェの『ツアラトゥストラ』という作品を後景に配してパアシ族を登場させ、「Marabar hill」を場所として設定することによって『ツアラトゥストラ』に内包する因襲打破の論理をその底流に示そうとした作品である。⁽¹⁴⁾

本節では「沈黙の塔」と「羅生門」との関連に着目し、そして「沈黙の塔」がどのように「羅生門」に受容されたかを究明したい。

竹盛天雄は先行論文⁽¹⁵⁾で、「沈黙の塔」は、鷗外が、当時厳しくなった当局の言論弾圧に対して、自分の立場をあきらかにしようとした作品だとしている。1910年9月に、鷗外の「ファステス」が発表されたあと、大逆事件の衝撃にともない、いよいよ当局の出版物に対する規制が強化されてきた。それに呼応するかのようには、『朝日新聞』に「危険なる

洋書」という評論では、鷗外の作品や翻訳も、道徳を壊乱する危険な書物の一つとして攻撃されていた。鷗外は、自分が当局にとって決して危険ではないことを説明しようとして、この「沈黙の塔」を書いたというのである。渋川驍は、「日本のこととすることを憚って、インドの西岸マラバア・ヒルにある、パアシ族の、沈黙の塔を語っているのだが、それが当時の不当な検閲態度に対する忠告であり、諷刺であることは、一見して明らかであるように書かれている」⁽¹⁶⁾としている。

では、該当箇所を詳しく検討してみよう。「沈黙の塔」の冒頭と末尾にはつぎの描写がある。

高い塔が夕の空に聳えてゐる。

塔の上に集まつてゐる鴉が、立ちそうにしては又止まる。そして啼騒いでゐる。

鴉の群を離れて、鴉の振舞を憎んでゐるのかと思はれるように、鴉が二三羽、きれぎれの啼聲をして、塔に近くなつたり遠くなつたりして飛んでゐる。

疲れたやうな馬が車を重げに挽いて、塔の下に来る。何物かが車から卸されて、塔の内に運び入れられる。

一臺の車が去れば、次の一臺の車が来る。塔の内に運び入れられる品物はなかなか多いのである。

己は海岸に立つてこの様子を見てゐる。汐は鈍く緩く、ぴたりぴたりと岸の石垣を洗つてゐる。市の方から塔へ来て、塔から市の方へ帰る車が、己の前を通り過ぎる。どの車にも、軟い鼠色の帽の、鍔を下へ曲まげたのを被つた男が、馭者臺に乗つて、俯向き加減になつてゐる。

不精らしく歩いて行く馬の蹄の音と、小石に觸れて鈍く軋る車輪の響とが、単調に聞える。

己は塔が灰色の中に灰色で畫かれたやうになるまで、海岸に立ち盡してゐた(中略)そして、沈黙の塔の上では、鴉が宴会をしている。(中略)

マラバア・ヒルの沈黙の塔の上で、鴉のうたげが酣である。(2頁～3頁、16頁)

これに酷似する描写が、「羅生門」にある。

あるひ
或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門らしやうもんの下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外ほかに誰もゐない。(中略)

何故なぜかと云ふと、この二三年、京都には、地震ちしんとか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災わざわいがつゞいて起つた。そこで洛中のさびれ方かたは一通りではない。舊記によると、仏像や仏具ぶつぐを打碎うちくだいて、その丹にがついたり、金銀の箱はこがついたりした木を、路みちばたにつみ重ねて、薪たきぎの料に賣つてゐたと云ふ事である。洛中らくちゆうがその始末であるから、羅生門の修理しゆりなどは、元より誰も捨て、願がへりみる者がなかつた。するとその荒果あへりみてたのをよ

い事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄て、行くと云ふ習慣さへ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るが、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉が何處からか、たくさん集つて来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまわりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。(1頁~2頁)

「沈黙の塔」では、竹盛の解釈によると、「この凶々しいく鴉」の啼き騒ぐイメージとともに、書き出される「高い塔」が、沈黙の塔なのである。この「塔」に市の方から馬車が、「一台の車が去れば、次の一台の車が来る」というような交合で、つぎつぎに何ものかを運び入れているのだ。しかも、「く鴉」の「く凶々しさ」は反復され、「そして沈黙の塔の上で、鴉が宴会をしているのである」と結ばれたかと思うと、たた一文で構成される最終章もくマラバア・ヒルの沈黙の塔の上で、鴉のうたげが酣である。という報告に当てられていく」となっている。(17)

「沈黙の塔」と同様に、「羅生門」における無気味さや圧迫感で構成される世界が的確で実感に富むというのは、風景の構図によって、「死」のイメージが鮮明に浮上してくるからであろう。

また、先述の芥川のニイチェへの関心を考えてみると、渡辺論文の中の次の考察に注目すべきである。

日本近代文学館の芥川龍之介文庫には、ドイツ語版と英語版のニーチェの著作が架蔵されている。ドイツ版の見返し五ページ目におよそ芥川文庫の記述のごとき文字が印刷され、そこに赤インクのペンで 'Hongo Feb, 11th 1913' と書かれている。これは芥川の字であろう。つまり、1913年2月11日に本郷で芥川はドイツ語版『ツアラトウストラ』を買ったのである。(18)

以上の議論をふまえると、芥川龍之介がこの「沈黙の塔」を読んだ可能性は、以下のよう

- ①、ドイツ版『ツアラトウストラ』を購入した後、生田長江の邦訳も読んだ。
- ②、逆に、生田長江の邦訳を読んだあと、ドイツ版『ツアラトウストラ』を購入した。
- ③、『三田文学』の初出テキストが目にあつた。

以下、これらの三つの可能性について考えてみる。

生田長江は、明治期有名な翻訳者であり、多数の西洋作品を訳し出し日本に紹介した。とくにニイチェの思想に深く感銘を受け、『ツアラトウストラ』の日本語訳をした。ちなみ

に、芥川を含む多くの文学者が読んだイタリアの詩人・小説家ガソプリエール・ダンヌンツォの『死の勝利』も、生田長江によって翻訳されている。

また、芥川と鷗外との深いかかわりは、従来の研究で確認されている。たとえば、中村真一郎⁽¹⁹⁾は、次のように述べている。

芥川竜之介の初期の作品にうかがわれる、さまざまの作家の影響のうちで、明治の小説家のそれを考えると、最初に目につくのは森鷗外の影響である。

(中略)

鷗外の影響のもつとも強かったのは、じつは芥川の作家的形成の根本にかくれている。この、対象からの距離をたもつ造形法に見られるのかもしれない。としたら、芥川に近代文学の秘密を開く鍵を手渡したのは鷗外であり、鷗外が芥川を作つたということになるのである。

したがって、鷗外からの強い影響を考慮すれば、②の可能性がもっとも高いと思われる。すでに示唆したように、明治の絶対主義精神は旧い過去のものとなり、それに代わり、西洋の近代思想、とりわけ、個人の主体性が重視される時代に入った。西洋文明を通して、古い価値を破壊して新しい価値の樹立を希求し、自由な精神を圧殺しようとする因襲、および強権的・抑圧的秩序道德の息苦しさに対する気運が高かったように思える。

「沈黙の塔」の「門」も「羅生門」の「塔」も、明治と大正という新旧時代の交替を意味する象徴となっているように見える。と同時に、「門」が「内部」と「外部」との境界であり、「塔」が「地」と「天」(神)との境界であるとも思われる。

ここで、もう一度、渡辺の論述を引用する。

あるいは楼上で鳥の啄むことを認識していると東アジアの塔の風葬の遠い記憶があるのかもしれない。もともと死者たちは、〈穢れ〉であると同時に〈聖〉なるものという両義的存在であった。しかし、死人はいまややっかいな腐敗〈物〉、聖性の失われた単なる〈穢れ〉になっていた。仏具や仏像がその聖性を失って、単なる木片にしか過ぎなくなったように、羅生門も放棄され、その聖性を日々失い、崩壊し、解体していくただの巨大な木材の集積、巨大で空虚な入れ物になりつつあった。死者は腐敗する物として、〈穢れ〉として人々の視線からできるだけ遠ざけられ、隠されたのであろう。どちらもかつては聖なるものであった記憶の共通性によって、羅生門の楼上は墓場になったとも考えられる。⁽²⁰⁾

また、前節で引用した中村真一郎の論文の「対象からの距離をたもつ造形法」という指摘から、「沈黙の塔」と「羅生門」との類似点を考えてみれば、重要な共通の装置が想起されよう。それらは、「沈黙の塔」のテキストに現れる「新聞」と「羅生門」のテキストに提

示される「旧記」である。たとえば、森鷗外が「沈黙の塔」では、語り手による主観的叙述のかわりに、客観的に距離を置いて、新聞記事よる事件の始末を提示しつつ、真実味を感じさせている。「羅生門」の「旧記によると」という語り方も同様に、平安時代の物事を「典故」すなわち間接的情報に基づいて描いているという点を強調している。興味深いことであるが、「新聞」とは、社会の出来事の報道・解説・論評を伝えるための刊行物であり、〈新しい〉見聞を意味している。これに対して、「旧記」とは昔の物柄を記録した文書であり、〈古い〉記録を意味している。そして、〈新〉と〈旧〉とをあわせて、「電灯の明るく照っている」西洋風の「ホテルの廣間」とは対照的に、「羅生門」にはつぎの場面がある。

その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてるからは、どうせただの者ではない。(7頁)

あえていえば、芥川が、「腐敗く物」「聖性の失われたる単なるく穢れ」と「鴉」をむすびつけることができたのは、「沈黙の塔」の対応描写がよほど印象的であったからであろう。以上のように、思想面においても表象面においても、「羅生門」は「沈黙の塔」を受容したのである。

5 まとめ

先に論じたように、「羅生門」のテキストにおける「旧記」の導入は「古い世界」の表象であるが、同時に、それは同時代のある事態の表象なのである。

先行研究がすでに指摘しているように、「沈黙の塔」の執筆背景には、大逆事件後の検閲制度の強化があった。たとえば、関口安義は『芥川龍之介の歴史認識』⁽²¹⁾で、明治43年の大逆事件で、蘆花は一高で「謀判論」と題して講演し、当時一高生だった芥川龍之介も聴いたはずで、芥川「羅生門」にはその影響があると言及している。

大逆事件による当時の検閲の問題について、田中純による同時代の発言を挙げてみる。

日本の図書検閲制度が、作家の扱ふ材料を或いは狭い範囲に限ることを余儀なくさせて居る点にある。吾々の現状の下に於て、旺盛な独自欲を持った若い作家達が、既に書き古され、語り古された材料の中に今一度探り入つて、其処から彼に独自の解釈と技巧とをらさうとするに到つたことは、むしろ当然すぎる程当然でなければならない。(田中純「新技巧派の意義およびその人々」)⁽²²⁾

この発言は、当時の図書検閲制度の厳しさの一端を示していると同時に、新進作家である芥川が置かれた「外的状況」をもうかがわせる。「既に書き古され、語り古された材料」が

「羅生門」にある「旧記によると」とリンクしている。というのは、「旧記」を使用したのは「日本の図書検閲制度が、作家の扱ふ材料を或いは狭い範囲に限ることを余儀なくさせて居る点にある」からである。

以上のように見てくると、「羅生門」の胎生は、明治末から大正にかけての、特に大逆事件後の日本の知識青年達を覆っていた憂鬱に共鳴して強い共振を生んだ芥川が、自身の生きる日本社会への鋭い洞察をとおして「沈黙の塔」のモチーフに共感したうえで、寓喩を込めて示したともいえようか。とすれば、魯迅は、芥川の「羅生門」に、鷗外の「沈黙の塔」のエコーを読み取っていたといえるのではないか。いや、もう少し控えめに言えば、魯迅は、「沈黙の塔」を翻訳するために綿密に読んでいたから、「羅生門」にその影を認めたとすべきか。

※本稿の参照するテキストは以下の単行本に収録される。

生田長江訳『ツアラトウストラ』新潮社、1911年1月

芥川龍之介『羅生門』春陽堂、1917年

注

- (1) 「『諸国物語』と芥川」（『国文学』第15巻第15号、1970年）
- (2) 『芥川龍之介：抒情の美学』大修館、1982年
- (3) 「『羅生門』—その成立をめぐる試論」（菊池他編『芥川龍之介研究』明治書院、1981年）
- (4) 「『羅生門』を書かせたもの—ブレイクとの関わりを中心に」（『解釈』、1991年）
- (5) 「『羅生門』における『ツアラトウストラ』受容」（『群馬県立大学 国文学研究』18号、1998年）
- (6) 前掲論文、59頁
- (7) 前掲論文、56頁
- (8) 藤井省三『魯迅事典』（三省堂、2002年）参照
- (9) 前掲書
- (10) 止庵編『周氏兄弟合訳文集 現代日本小説集』新星出版社、2005年
- (11) 傅国勇『筆底波瀾 中国百年言論史の一種読法』廣西師範大学出版社、2006年
- (12) 竹内好訳『魯迅文集』筑摩書房、1978年
- (13) 孫伏園・孫福熙『孫氏兄弟談魯迅』新星出版社、2005年
- (14) 「森鷗外「沈黙の塔」論—その前景と後景」（『日本文学と人間の発見』世界思想社、1992年）
- (15) 竹盛天雄「『ファステュス』から「沈黙の塔」へ—言論圧迫への諷刺と提言」『国文学：解釈と教材の研究』25巻2号、学灯社、1980年
- (16) 洪川驍『森鷗外—作家と作品』（筑摩書房、1964年8月）（新保邦寛「鷗外「沈黙の塔」：一名、概世悲歌（拝火教徒）騒動始末記」『稿本近代文学』（25号、2000年）で言及されている。）
- (17) 同（15）

- (18) 同 (5)、36 頁
- (19) 『現代作家全集八・芥川龍之介』五月書房、1958 年、63 頁
- (20) 同 (5)、42 頁
- (21) 新日本出版社、2004 年
- (22) 関口安義『芥川龍之介研究資料集成 第一巻』日本図書センター、1994 年 9 月、(初出『新潮』1994 年 10 月)